

左派・リベラル・保守・右派・極右(ファシズム)規定再論

資本主義の剥き出しの暴力支配から、国民国家の共同幻想性による国民統合と国際協調を突き出し、「人権」や民主主義を掲げて暴力性を覆い隠したグローバリゼーションが世界を覆い、資本主義の最終段階として登場しつつ、資本主義の終わりの始まりが宣言さるべきときに、資本主義の墓掘り人たる左派(反資本主義の社会変革派)が定立し得ず、またもや、戦争とファシズムの隆起が起きてきています。

そもそも、安倍元首相の政権返り咲きの際、欧米のメディアは極右政権の誕生と報じていたのに、日本では、今に至るまで、安倍政治の支持層を「岩盤保守」と言い、トランプ支持層も同じように「岩盤保守」というメディアや学者がいるのです。このあたりのことが、今日のファシズムの蠢動としての右派ポピュリズムの台頭を許す一因ともなっていると想えます。この間試行錯誤してきた、政治的動向の思想的分類規定をまとめ直す作業をしておきたいと思います。標題とは逆に規定していきます。分析の指標は①国家主義批判、②反差別主義、③資本主義社会への評価です。

I 政治潮流の概念的分類

(1)極右(ファシズム)

極右(ファシズム)の指標には、①国家主義—超国家主義があります。超国家主義というのは、ドイツ・ナチズムの第三帝国とかアーリア人種での世界制覇なり、国家を超えたところでのファシズム的支配を唱えることがあるからです。これは日本ファシズムの「五族協和」とか「大東亜共栄圏」を唱えた、欧米帝国主義への対抗意識・敵対視において汎アジア主義的に突き出しつつ、アジア諸国を植民地化・支配収奪する構造を生み出しました。②もうひとつの指標—差別主義は、これが右派との違いは、右派はポピュリズム的に反差別を唱えることがあるのですが(註1)、差別を正当化するのです。③に対しては、ファシズム体制を完成させる以前のファシズムの蠢動の右派ポピュリズム時代には、金儲け主義批判や労働者の味方としての反資本主義的なことを突き出すことがあります。それはあくまでも、ごまかしでしかありません(註2)。これへの対抗・批判は、「差別をゆるすことは無限の殺し合いを認めることになる、それでいいのか？」というところで、捲き込まれるひとたちを引き剥がしていくことが必要になります。

(2)右派

右派は、①国家主義的で、②差別的な主張をします。封建主義的な言説も吐くということで、③反資本主義的でもあります。ただ、極右との違いは、「民主主義」を全否定することもなく、差別を全肯定はしません。このあたりは、保守とリベラルとの対比的にもとらえることです。特に、右派は議会主義的には、ポピュリズムを常套にします。ファシズムの蠢動としての右派ポピュリズムとして顕れます。ナチが、嘘とペテンで政権を獲得していった歴史を押さえておく必要があります。

(3)保守

そもそも保守概念がもっともあいまいになっています。保守の守るという概念では、「命と生活を守る」なり、「人権を守る」ということもあります。ところで 保守が一番に守るのは③の資本主義社会の体制を守るということです。①国家主義でいえば、国家主義の枠内にあり、国家の安全保障というところにとらわれたままです。②の差別や「人権」(註3)の問題に関しては、リベラルと右派の間にあると言い得ます。

(4)リベラル

リベラルは国家主義と人権概念のはざまにあるといえます。しかし、①国家の論理にとらわれていることには違いがありません。リベラルは、保守の左派方向へのはみ出し的であり、②人権とか反差別を一応押さえている、と言い得ます。これは、③資本主義の暴力性を修正したところの概念、「人権」や民主主義を大切にするというところで出されていることです。

(5)左派

さて、この左派規定がもっともあいまいになっていると言い得ます。それは、そもそも「ロシア革命」やそれに続く「衛星圏」の成立、「中国革命」の成立を、「社会主義国家」が成立したとして(註4)、一国社会主義は可能だとしたスターリン主義国家論を「社会主義国家」として、なおも冷戦構造の中で国家資本主義の「全体主義国家」を資本主義の擁護者たちが「共産主義国家」(註5)として、反共産主義の宣伝に用いた事から混乱をもたらしています。それは、当事「国家」の側も「社会主義国家の防衛」というところで、①国家主義的であり、②差別性において、何ら差別性は克服されていず、国家主義的に全体(主義)への奉仕という概念で、生産性向上の国家資本主義概念から来る、差別性を克服できないどころかより差別的にもなっていると言い得ます。③そして、国家資本主義ですから、反資本主義にもなっていません。左派であるところの条件は、わたし的には①国家主義の止揚に向かうこと②反差別であること③資本主義の止揚に向かうこととなると押さえています。

(6)補説—「社会主義」を装う全体主義国家

さて、ここまで書いて、アーレントのいう「全体主義」は何処に位置づけられるのかの問題があります。「共産主義の第一段階としての「社会主義」という意味では、「左派」に位置づけられるはずだったものが、極右的なところにループしてしまったとしか言いようがないのです。ただ、アーレントが「全体主義」概念を突き出したことで、ファシズム論が曖昧になってしまったことがあります。それは、「全体主義」というネーミングだと「個の犠牲の上になりたつ全体」概念なのですが、それを「社会主義」と規定すると、「一人は万人のために、万人は一人のために」とする社会主義概念と離反します。ファシズムは結局個の利益を追求するエゴイズムなのです。国家社会主義＝ファシズムと社会主義は相容れません。アーレントは、このあたりを押さえ損なって、ロシアのソヴィエト社会主義人民共和国連邦を「社会主義」として押さえ、それを全体に奉仕する個人という概念で(これはソヴィエトが党の独裁に転化したときに、党の中での立身出世というところのエゴイ

ズムが社会を動かしていったところでファシズム的偽装「全体主義」になって行ったのです)、「全体主義」と押さえた錯誤から来ています。ロシアもその「衛星国」も中国も社会主義社会の定立に失敗した国家資本主義という資本主義国家なのです。

II 日本の政治勢力の分類

ここではファシズム論との絡みで、日本における政党を流利的に押さえておきたいと思えます。

(a)自民党

自民党はいろいろなひと・グループがいたのですが、総体として保守と右派の連合で、異端的にリベラルといわれるひとも含んでいました。問題は、ジャーナリストや学者たちが、保守と右派を一緒くたにしていたことです。第二次安倍政権が成立したときに、ヨーロッパのジャーナリズムが「極右政権の誕生」と謳っていました。日本のジャーナリズムはヨーロッパの極右勢力の分析はそれなりにしているのですが、自国の極右・ファシズム的な動きを押さえようとはしません。それが安倍政治を生み出した一因となったとも言えます。極右的な部分が伸長し、時には保守的な政策もポピュリズム的なこととして突き出しつつ、保守層の解体・取り込みで、極右的な失われた十年の政権を生み出したのです。

(b)公明党

宗教勢力がファシズムの芽になるという押さえが、左翼党派の中にもありました。それは、日本会議内の宗教団体や旧統一教会や「キリストの幕屋」とか、カルト的な宗教団体を見れば、当て嵌まるのですが、宗教団体は体制順応的に変化していくことによって、むしろどちらかという右よりの保守層を形成していくことになります。

(c)国民民主党

そもそも労働団体を支持基盤にした政党の中で、旧社会党に対抗する労使協調路線の労働団体を支持基盤とする民社党という団体がありました。そこから、維新にまで移った政治家がいました。指標は①の国家主義なのです。ムッソリーニが、レーニンが期待するイタリア社会党員だったのに、元祖「ファシスト党」にまで行ったことと類比的にとらえておかねばなりません。労働団体を支持基盤にもしているのに、労働問題における②差別の問題での突き付けをしていくことが必要です。問題なのは、労働問題における核心的な差別（「労働能力」を巡るヒエラルヒーや正規—非正規と差別化）ということ、「労働力の価値」という二重に物象化された差別や、生産手段の所有からの排除(私有財産制)という差別まで掘り下げて問題をとらえることが必要になってきます。

(d)日本維新の会

元祖右派ポピュリズム政党です。そもそも、行政改革、地方分権、脱原発を掲げて、極右の安倍元首相に秋波を送りつつ、安倍政治とシンクロナイズしながら会を作っていました。結局、残った政策は、福祉切り捨ての行政改革で、脱原発も、地方分権もかなぐり捨てました。結局国家主義的なところで、権力を握っていたいというところでの大阪都構想という二極政治を掲げています。この政党の最初の橋下党首が、「民主主義」にある「少数

意見の尊重」ということを切り捨て、多数決の原理を宣揚することで、ファシズムに最も近い政党だったのですが、他のより右派のポピュリズム政党が出てきて、霞んでいます。

(e)保守党

この政党は、他の右派が現在的にポピュリズム的な主張をしているのに、極右そのものの主張をしていることです。

(f)参政党

この政党は右派ポピュリズムの象徴的政党ですが、ポピュリスト政党の特徴は、票を得るためにはどのような政策を掲げるかで、一見保守的なことも、そして「右でもない左でもない」政策を掲げはするのですが、核心的なところの政策すなわち、先にあげた、①国家主義②差別主義③資本主義を指標にして、そこでどのような政策を立てているかを見極めることが必要です。選挙のキャッチフレーズに使った「日本人ファースト」という標語は、まさに②差別排外主義的標語で、①国家主義的な標語でもあります。まだ、ポピュリズム的なところに止まっていますが、変遷する政策の中で、何が核心としてあるかをきちんと押さえ批判していくことが必要です。

(g)立憲民主党

立憲民主党はリベラルを含む総体的には保守です。それは①国家主義において自民党と変わりはなく、安全保障という論理に取り込まれていきます。②の差別の問題でかろうじてリベラル的ですが、自民党の保守層とそれほど変わりはありません。ただ、自民党が、その内にある保守層が解体的になったので、これらが保守本流的な様相になっています。差別と国家主義批判で、リベラル層へ働きかけていくことが必要になります。

(h)れいわ新撰組

この政党は右左というところで位置づけがたいグループです。代表が自ら「右でも左でもない」と言っているポピュリズムそのもののグループです。党名からすると、「新撰組」は維新よりも右で、「れいわ」などという差別の象徴としての天皇制に組み込まれる元号を使っているのも、名前からすると極右政党で、右でも左でもない政党名の「参政」と党名を取り替えると、名は実を表すとなります。わたしは戦後政治のポピュリズムの走りは、保守ポピュリズムの小沢一郎元自民党幹事長で、一時タッグを組み、まさにポピュリズム政治をなしてきました。小沢一郎が自民党内の権力争いで敗れ、自民党を飛び出しました。権力の掌握とかキャスティングボードを握るとかいうところで、状況に合わせてマニフェストを変えていくというまさにポピュリズムを旨とするのです。この党を、左派ポピュリズムと誤解しているひとがいるのですが、左派ポピュリズムなどありえないのです。そもそもあやふやな MMT 理論を、自らの福祉政策の梃子とするとか、先の参議院選で、右派ポピュリズムの排外主義政党が勢力を伸ばしそうとみると、外国人労働者の排除的言辞をはいたりするとか、理論的整理がなされていないのです。そもそも、この政党がいったい何をしようとしているのかよく判りません。きちんと理論的整理をするひとが中から出て来ないと、早晚消え去るか、右派ポピュリズムの中に飲み込まれてしまいます。

(i) 日本共産党

そもそも、「ロシア革命」を「社会主義革命の定立」とした錯誤から、マルクス・レーニン主義を党是とする党でした。そもそもマルクス・レーニン主義とはスターリンが唱えていた主義でしかないのです。スターリン主義の総括がなされていないので、歴史的に「マルクス主義者は差別の問題を対象化ができていない」ことの象徴的な組織でした。かろうじて、資本主義的「人権」概念から差別の問題をとらえ返そうとしてきていますが、そもそも、組織論的にヒエラルヒーをもった組織で、前衛党論という差別的な運動・組織論から抜け出せません。いつのまにか、プロ独やマルクス・レーニン主義などという党是を取り下げ、リベラルなところで差別を捉え返して来ていますが、スターリン主義・レーニン主義の総括まで踏み込んでいかないと、反差別を基底に据えた党名からする共産主義志向の党にはなりません。

(j) 社民党

党名の歴史からすると一応左派志向ですが、③の反資本主義ということは、ヨーロッパ的な構造改革的革命論的なところでそのうちに孕んでいるともとらえられるのですが、もはやリベラルの域を脱し得ない状況になっています。戦争とファシズムの隆起の中で、それに対峙するためには、①反国家主義②反差別主義というところから、きちんと守旧派的なところから脱し、反差別的改革政党として突き出していく必要があるのではと念っています。

(註)

1 参政党は、「日本が最初に反人種差別を唱えた」という話を当の党首がしているのですが、単に先発の欧米帝国主義の汎アジア的帝国主義への差別を問題にしているだけです。これは、アジアの中での帝国主義的支配を問題にしていません。自分たちが差別されるのはいやだ、差別する側になりたいという反差別にはならない論理を振り回しているだけです。

2 トランプのラストベルトの白人労働者層のとりこみ、人種差別的排外主義的政策で、自分たちが不利益を受けているのは、移民のせいだという虚偽をふりまき、差別主義的なところにとりこんでいきました。そもそも、ナチはユダヤ人差別を反「ユダヤ資本主義」的言説で反資本主義的突き出しをし、労働者も白色的に取り込んでいったのです。

3 「人権」概念はキリスト教的「天賦人権思想」から来ているのです。そもそも帝国主義の植民地支配の支配イデオロギーにしかならなかったのではないかとわたしは押さえています。人権抑圧国を解放するとして差別の極としての戦争の口実にまですたのです。「人権」の意味があるとしたら、「差別のない関係の物象化」として押さえ、反差別として押さえ直すことです。

4 レーニンが、新経済政策を採用したときに、「これは国家資本主義だ」と規定していました。そこから、「革命」の防衛的なことにとらわれる中で、それでもドイツの革命や他

の国への革命の波及を求めていました。それに対してスターリンは、一国でも社会主義建設は可能だとして、国家資本主義を拡げていくことを夢想したのです。それは、結局アーレントのいう「全体主義国家」というファシズムの一種にしかならなかったのです。

新左翼諸党派の多くは、反スターリン主義を突き出しましたが、それをレーニン主義批判まで溯らないと、反スタ・スターリニズムにしかならないのです。そもそもレーニンの組織論、革命論からのとらえ直しが今問われています。次回巻頭言の課題です。

5 共産主義社会というのは階級支配の機構と共同幻想性してある国家が死滅した社会を指すのであって、共産主義と国家はアンチノミーなのです。

(み)

(「反差別原論」への断章)(108)としても)